

小川真寛, 藤本一博, 京極 真 (編)

5W1H でわかりやすく学べる 作業療法理論の教科書

宮 口 英 樹

(広島大学大学院, 作業療法士)



出会った幸運を感じる OT 理論の教科書

臨床場面において, 対象者との良好なコミュニケーションの担保は, 治療効果を高めるといわれている。そのため OT は自身のコミュニケーション能力を高めようと, 研修会に参加したり, また書籍をあたりたり等, 努力をする。膨大な関連資料から適切な書籍を手にするのはとても難しい。これは新人 OT が理論を学ぶことにも似ている。作業療法において理論を学ぶことは大切だとわかっているが, どこから手をつけてよいかわからないのが現状であろう。もし本書が目にとまったらとても幸運である。

幸運だと思う一番の理由は, 編者が「理論をわかりやすく (序)」をコンセプトにしたというように, 読み手目線からつくられている独創的な構成となっていることである。「なぜ理論が活用されないか? (第1章 小川氏)」という見出しが語るように, 「理論がわかりにくいと感じているのはあなただけではありませんよ」とコミュニケーションをしているように理論の重要性を語りかけてくる。

編者は, 小川真寛氏, 藤本一博氏, 京極 真氏の3名である。従来, わが国の作業療法理論は, 海外から取り入れて日本流にアレン

ジしながら用いるのが主流であったが, 日本からオリジナルのアイデアを海外に発信しようと挑戦を続けている気鋭の教育・研究者である。本書の項目もさることながら, 3人が本の企画構成をディスカッションしたであろう, 創り上げるプロセスに興味をもった。

本書は, 全3章 (作業療法における理論, 理論の紹介と実践, 作業療法理論に関する Q & A) から構成されている。第1章の「作業療法における理論」では, Reed の理論の範囲に基づいた分類 (超メタ, メタ, 大範囲, 中範囲, 小範囲) がなされていてわかりやすい。私が大学院で初めて作業療法理論に触れたフレームワークは, 恩師の宮前珠子先生が示してくれた「理論を範囲で分類する」という説明であった。今でもそのフレームワークは私の中に刻まれており, こうして受け継がれている書籍を目にするのは嬉しい。本書の核となる第2章の「理論の紹介と実践」では, 理論の範囲に応じて21の理論が解説されている。そして, WHY (なぜ), WHAT (どんな理論を), WHO/WHOM (誰が/誰に), WHEN (いつ), WHERE (どこで), HOW (どのように) 活用できるかがイメージできるように構成されている (巻末には一覧表あり)。本書の最大の特徴である。

う。

いうまでもなく, 臨床は一つの理論で実践できるものではない。対象者に応じて, あるいは環境や社会保障制度に応じて, 適宜, 複数の理論を組み合わせる必要がある。作業療法の実践に役立つ理論かどうかは, OT ではなく, 対象者が教えてくれる。本書で取り上げられている理論は, 作業療法の現場で使用されている理論である。その範囲は, CI 療法や認知神経リハビリテーションのように神経科学をベースにしたものから, 社会モデルに至るまで幅広く網羅されている。現場ありきという編者らの想いに共感できる。

予防期から, 急性期, 回復期, 維持期, 終末期と作業療法が取り扱う範囲は広い。また, 近年は, 学校教育, 就労支援, 司法領域と, OT が創造的に活動する必要性が求められている。まさに5W1Hである。そのような役割を若い作業療法学生に知ってほしいという著者たちの願いを感じる。本書を, 理論を学びたい作業療法の初学者だけではなく, 知識の幅を広げたい最前線の臨床家, 教育者にも推薦したい。

B5判 264頁 4,200円+税
メジカルビュー社刊
☎ 03-5228-2050